

## 【vol.20】Queen の名曲に学ぶ、メジャースケール活用法 ～その2～

こんにちは、大沼です。

今回も引き続き、メジャースケールの実戦フレーズを練習して行きましょう。

参考にする楽曲は、これまた『Queen』で、“I Was Born To Love You”です。

一時期、TVなどで頻繁に流れていたのも、知っている人は知っている曲でしょう。

今回は、この曲のギターソロからメジャースケールの活用例と、プレイのアイデアを学んでいきます。

前回もそうでしたが、クイーンの有名な曲(特に明るい(雰囲気)の曲)は、メジャースケールやメジャーペンタの事例として、かなり参考になるんですね。

メジャースケールは、現状、全てのスケールを考える時の基準となっているスケールですが、耳馴染みがありすぎて、フツのモノにしか聴こえないスケールなので、上手く使わないと、なんだかのっぺりしたような、イモくさい感じになったりします。

ですが今回の楽曲のソロは、ブライアン・メイのセンスによって、スリリングでカッコいいフレーズに仕立て上げられていますね。

クイーンは曲も良くて聴きやすいですし、ギターも参考になるということで、研究対象としてはもってこいだと思います。

もしかしたら、今後も参考事例として取り上げるかもしれませんが、クイーンが好きな人は、色々コピーしてみると良い勉強になるでしょう。

それでは、実戦の方に入っていきますよか。

まずはkeyの確認ですが、“I Was Born To Love You”はkey=A ♭になっています。

なので基本的にA ♭メジャースケールを使って演奏されている事になりますね。

使うスケールが「A ♭メジャースケール」と言う事は、ギター的には、「トニックをA ♭に見て(設定して)メジャースケール(のポジション)を弾く」と言う事ですね。

前回と同じく、こう言われて、覚えているポジションをすぐに指板上に見ることが出来て、パッとそのスケールを弾ける、というレベルを目指してください。

ソロの構成としては、前半はメロディックなリード、後半は、ハードロックやヘヴィメタルでおなじみの、ツインギターによるハモリのパターンです。

テクニク的には、そんなにとんでもない事はしていませんが、楽曲のテンポがそこそこの速いので、ギターソロとしてはそれなりの難易度になっています。

1つ1つのフレーズの意味を考えながら、じっくりとマスターしていきましょう。

それでは、サンプル譜例は以下になります。

### Youtube 原曲リンク

[https://youtu.be/Fna56a\\_r41s](https://youtu.be/Fna56a_r41s)

※万が一、リンク先の動画が削除されている場合は、音源を購入するか、曲名等で検索してください。

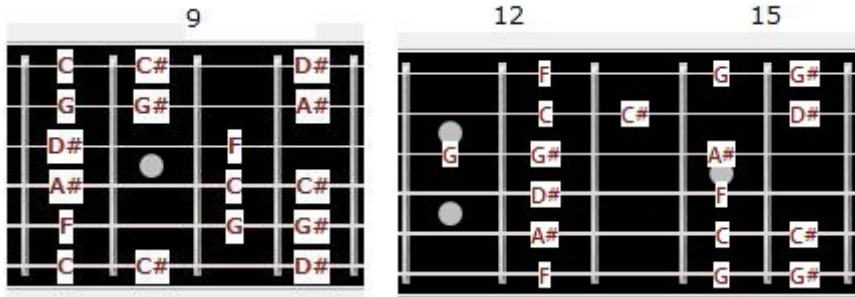
### 譜例、『Queen』 “I Was Born To Love You ” 2:45～風フレーズ

The image displays a guitar score for the solo section of Queen's "I Was Born To Love You". The score is presented in three systems, each with a standard musical staff and a corresponding guitar tablature (TAB) staff. The key signature is B-flat major (two flats) and the time signature is 4/4. The solo begins with a *mf* dynamic marking. The first system covers measures 1 and 2, with a *Cm* chord indicated above the staff. The second system covers measures 3 and 4, with chords *D<sup>b</sup>*, *A<sup>b</sup>/C*, *D<sup>b</sup>*, and *A<sup>b</sup>/C* indicated. The third system covers measures 5 and 6, with a *B<sup>b</sup> m* chord indicated. The tablature includes various techniques such as bends, slides, and double stops, with some notes marked as "full".

※それなりに細かいフレーズが続きますので、原曲のテンポで弾くのが厳しい場合は、自分の弾けるテンポで弾いてもらって構いません。

※ある程度フレーズ同士がキチンと繋がるように作ってありますので、指使いを考えてみましょう。

主に使っているポジションは、毎度おなじみのこの2つです。



※スケール表で音名の $\flat$ 表記が出来ないので、 $G\sharp$ を $A\flat$ 、 $A\sharp$ を $B\flat$ 、 $C\sharp$ を $D\flat$ 、 $D\sharp$ を $E\flat$ と読みかえて図を見てください。

ちなみに9小節目以降のフレーズでは、実は使っているスケールが、 $A\flat$ メジャースケールから $E\flat$ メジャースケールに変わっています。

使っているポジション(形)も上記のものとはほぼ同じなので、トニックを $E\flat$ に変えて、それぞれを確認しておきましょう。

ここは「何故そうなっている(している)のか？」を、理論的にも説明できますが、現段階ではその前提知識を学んでいませんので、細かいことは気にせず、「そういうアレンジなんだな」と、思っていてください。

※簡単に説明してしまえば「9小節目から転調している(様に見なしている)」という感じです。

前回にも言えることですが、原曲のフレーズ(というかソロ全体の構築)を簡単に分析すると、

『ゆったりめのメロディックなパート⇒段々と音数を増やしたりしてスリリングにしていく⇒ピークに達する⇒次のパートに繋ぐようなフレーズ(パート)』

という感じになっていますね。

この曲の場合で言えば、ギターソロの終り頃からサビに向かって強めのコーラスが入っているので、ソロの方もその辺りはかなりテンション高めですが。  
(※サンプルの譜例もそういった展開を意識して作っています)

さらに、ソロ後のサビ中から曲のラストまでずっとギターのリードが続いているので、そこまで含めて全体として見てもいいかもしれませんね。

ギタープレイのテクニカルな面としては、激しめのチョーキングやビブラート、ランフレーズ、リニア(直線、指版の横方向)にスケールを移動するフレーズと、ロック系ギターのベーシックなテクニックが詰まっています。

これまでは、スケールポジションを主に縦方向(6弦⇔1弦)に見てきましたが、サンプル譜例の15小節目の様な、横に動かす見方も意識しておきましょう。

最終的には、どの弦でも、トニックがどこにあつて、左右に何フレット動けば、スケールの次の音になるのか？を把握できるレベルを目指します。

さて、こうしてみると、16小節程度の長さのソロですが、沢山のアイデアが詰まっていることがわかりますね。

今回のテキストで解説したように、フレーズを分析し自分の中に取り入れて、それを実際に他で使うことによって、自分自身のネタとなっていくます。

その分析の際に使えると便利なのが、スケールなどの、音楽理論の知識です。

例えばメジャースケールなどの楽典を知らなくても、1音1音拾っていけば、これらのソロを耳コピすることは可能です。

僕も理論(や楽典)をほとんど知らなかった中高生の頃は、そうやって耳コピしていました。

ただ、同じ耳コピでも、最初に曲を分析して(具体的には曲のkeyやコード進行など)、「このソロはA♭メジャースケールである」ということをわかって耳コピするのと、そうでないのでは、圧倒的に効率に差が出ます。

後、僕が「音楽をやるにあたって、最低でも基礎理論は必須である」として、こうして講座をやっているのは、それを知らないと楽曲(と言うか音楽そのもの)の分析ができないから、ですね。

ここまでの講座で色々な事を学びましたが、講座を始める前とは、曲を聴いていて見える世界が変わってきていませんか？

それが音楽の知識や感覚が身についてきた、成長の証です。

改めて、今後もじっくりと上達していきましょう。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼